

追補：ガラクトース血症の検査法とカットオフ値の現状（2002年2月）

市原 侃 鈴木 健¹⁾ 藤本 昭栄²⁾
渡辺 倫子³⁾ 福士 勝⁴⁾

日本マススクリーニング学会技術部会，日本マス・スクリーニング学会精度管理委員会編，新生児マス・スクリーニング検査とその精度管理－検査の進め方，データ解析，精度管理－（プログラムソフト付き），日本マス・スクリーニング学会，東京，2002，pp. 4-8-4-10

ガラクトース血症のマス・スクリーニングにおいて，全国の検査実施施設の酵素法の導入に伴い，検査方法，カットオフ値，再採血率が大きく異なっている現状を示した。今後，適切な検査方法の組み合わせとカットオフ値についての検討が必要と考えられた。

¹⁾ 財東京都予防医学協会

²⁾ 財大阪市環境保健協会

³⁾ 財東京顕微鏡院

⁴⁾ 財札幌市保健福祉局

感染微生物による汚染

高橋 健一

社団法人日本水環境学会編，日本の水環境
1 北海道編，技報堂出版，東京，2001，pp. 157-161

飲料水や自然環境中の水が感染症の原因となる微生物に汚染されると，水系感染症を引き起こす。原因となる微生物には，寄生虫や細菌，ウイルスなどがある。人獣共通感染症であるエキノコックス症に関しても，水系からの感染

の可能性が指摘されている。そこで，北海道で流行がみられるエキノコックス症について，生活環や流行の変遷，そして，飲料水対策について解説した。

Transmission Ecology of *Echinococcus multilocularis* in Wildlife : What Can Be Learned from Comparative Studies and Multiscale Approaches?

Patrick GIRAUDOUX¹⁾, Pierre DELATTRE²⁾, Kenichi TAKAHASHI, Francis RAOUL³⁾,
Jean-Pierre QUERE²⁾, Philip CRAIG³⁾ and Dominique VUITTONH¹⁾

Cestode Zoonoses: Echinococcosis and Cysticercosis, P. Craig and Z. Pawlowski (Eds.),
IOS Press, Amsterdam, 2002, pp. 251-266

アラスカ，中国，北海道，そして，フランス東部での調査結果をもとに野生動物間でのエキノコックス（多包条虫）の伝播生態について述べた。エキノコックスの伝播は，ハビタットの異質性が低く，周期的個体数変動をする感受性の高い中間宿主にとって好適なハビタットの割合が高いランドスケープでより生じやすいことや，伝播過程は宿主の生態に強く依存し，キツネの行動様式や主たる餌資源の分

布などによって，感染の季節的変化を含め地域での伝播様式に違いの生じることを示した。また，異なるスケールでのランドスケープや群集の解析によるエキノコックスの伝播に関する総合的な研究の重要性について指摘した。

¹⁾ Universite de Franche-Comte

²⁾ Campus international du Baillarguet

³⁾ Salford University

家ネズミ類の生態と防除について

高橋 健一

農家の友, 53(11), 110-112 (2001)

ドブネズミなどの家ネズミ類は、住居環境や農業及び畜産環境に入り込み、経済的な被害や衛生上の害をもたらすことがある。特に、秋以降気温の低下とともに建物などに侵入する機会も多くなる。家ネズミ類に対する効果的な対

策を行うためには、その習性を知ることが大切である。そこで、家ネズミの種類・生態・被害、そして、防除法について解説した。

わが国における野生動物の疥癬：北海道のキツネでの流行

高橋 健一 浦口 宏二

病原微生物検出情報, 22(10), 7-8 (2001)

ヒゼンダニは、ヒトを含む各種哺乳動物に寄生し、疥癬を引き起こすことが知られている。近年、北海道でキツネに疥癬の流行が認められたことから、その地理的分布とキツネの生息数に与える影響について報告した。北海道内の78市町村で捕獲されたキツネ458頭を調査したところ、36市町村の76個体(17%)のキツネにヒゼンダニの寄生が確認された。支庁別にみると道南方面の渡島、檜山、後志支庁

管内を除く11支庁のキツネからヒゼンダニが確認された。また、根室半島におけるキツネの生息数調査では、1998年以降繁殖ファミリー数が減少し、2000年には1997年以前の1/4となった。以上の結果から、北海道では広い地域でキツネの間に疥癬の流行がみられ、そのことにより地域的にはキツネの生息数の減少が起こっていると考えられた。

遺伝子診断法

武士 甲一

国立感染症研究所獣医科学部編, 炭疽菌検査・診断マニュアル,
東京, 平成14年2月, pp. 12-15

PCR法による炭疽菌の検査について、鋳型DNAの調製法、標的遺伝子とその増幅用プライマー、増幅条件、培

養法の併用の必要性等について解説した。

北海道におけるボツリヌス中毒事例および PCR法を用いたボツリヌス迅速診断法の開発

武士 甲一

国立感染症研究所細菌・血液製剤部編，ボツリヌス症の手引き・資料集，
東京，平成14年2月，pp. 106-114

北海道でこれまでに発生したボツリヌス食中毒の概要，
いずし製造におけるボツリヌス菌の制御法，抗毒素の配備

況，PCR法による検体からの神経毒素遺伝子の検出法に
ついて解説した。

稀少ワシ類の鉛中毒死とエゾシカ猟 ー北海道の生き物たちに起こっていることー

神 和夫

廃棄物学会編，廃棄物学会誌市民がつくるごみ読本C&G，
第6号，東京，2002，pp. 82-83

1996年以降，北海道東部を中心に急増したオオワシ・オ
ジロワシの鉛中毒の原因が，エゾシカ猟に使用された鉛製
ライフル弾にあることを解説した。

増えすぎたエゾシカの個体数管理が急務とされ，有害駆
除や冬季の銃猟が行われているが，ハンターによって回収
されず，放置される個体がある。こうしたエゾシカ体内に
はライフル弾の鉛破片が残っており，越冬のために飛来し

たワシ類がこの死体を摂食するため鉛中毒を発症する。オ
オワシ・オジロワシは海ワシ類と呼ばれ，本来は主に沿岸
で魚類を餌としているが，最も餌の不足する厳冬期にエゾ
シカの死体があることから，ワシ類の生態に変化が生じた
と考えられた。

鉛弾の使用禁止，純銅弾・フェイルセーフ弾の推奨など，
行政の取り組みについても触れた。

濁 度

平間 祐志

日本分析化学会北海道支部編
演習で学ぶ環境，三共出版(株)，東京，2002，p. 45

濁度について河川の流量との関係を概説し，札幌市を流

れる河川を例に濁度の季節変動について解説した。

硬 度

伊藤八十男

日本分析化学会北海道支部編，演習で学ぶ環境，
三共出版(株)，東京，2002，pp. 39-41

水の硬度の定義と測定の意味，水質基準等について解説した。
し，一時硬度と永久硬度の計算方法を事例をあげて紹介し

電気伝導率

伊藤八十男

日本分析化学会北海道支部編，演習で学ぶ環境，
三共出版(株)，東京，2002，pp. 43-44

水の電気伝導率の測定の意味等について解説し，実測し の電気伝導率の推定方法について事例をあげて紹介した。
た電気伝導率からの水系の区別の可否，水質成分濃度から

アルキル水銀の毒性

内野 栄治

日本分析化学会北海道支部編
演習で学ぶ環境，三共出版(株)，東京，2002，p. 7

アルキル水銀の毒性について，その概要を解説し，併せ た。
て，水質汚染に起因するアルキル水銀中毒例について述べ

が ん

澤田 幸治

鈴木範男，田中 勲，矢沢洋一編著，分子生物学への招待，
三共出版(株)，東京，2002，pp. 39-41

がんの分子生物学的理解の基礎となった RNA がんウイルスやヒトのがん遺伝子の発見とそれらの機能，がん遺伝子の活性化のしくみ，DNA がんウイルスのがん遺伝子の機能及びがん抑制遺伝子の発見と DNA がんウイルスのがん遺伝子との関わりについて概説した。